
あの時・・・・・

山口多聞

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの時・・・・・

【著者名】

Z5630B

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

様々なドラマが生み出される中、その裏にスポットライトが当たることはない。この話は、そんな裏の話に光を当てる。

(前書き)

IRの話では、去年（2006年）の映画のネタバレ要素を含むので、「注意ください」。

数々生み出されるドラマ。それは多くの人に、夢や希望を与える物。だが、その影には、多大な知られざる苦労があるといふことも、事実なのだ。

もしかしたら、あのシーンの裏で、こんなことがあつたかもしない・・・

コナン10周年記念超大作、名探偵コナン探偵たちのレクイエムのラストシーンの撮影がここで行われていた。

ラストシーンとは、もちろんあの怪盗キッドがジェットコースターに引っかかった爆弾を捨てるシーンである。

しかし、実は最初このシーンは爆弾をギリギリの所でコナンが捨

2006年11月 横浜 マジカルランド

てるという予定だった。しかし、監督であり原作者である青山氏（注意1）がこれにクレームをつけた。

青山氏

「この映画では快斗^{カッタ}の活躍があまりないから、最後^{ハシ}で一発大きい役割を果たしてもらいたい！」

この鶴の一言で、脚本が急遽書き換えられたわけだが、このとばつちりを喰らったのは誰であら？、怪盗キッド」と、黒羽快斗である。

快斗

「じょうだんじやねえぜ、青山監督。」

横浜のランドマークタワーに設けられた発進台の上で青山監督への愚痴を垂れる快斗。そりやあ愚痴も言いたくなる。

この映画の設定は夏、そのため、本編の収録のほとんどは10月までに終わっている。しかし、このシーンは監督の強い要望によつて後付されたシーンのため、撮影は映画制作作業が始まつてから決まつた。だから、撮影の予定が決まつたのは先月の事であった。

さて、今回の撮影する場所は海沿いである。加えて季節は入つたばかりとは言え冬。つまり風が強くなる季節。

その中でハンググライダーで飛べといつのだから、快斗の気持ちはわからぬもない。そのせいか、さつきからスタッフがいたわりの声を掛けてくる者が絶えない。

スタッフA

「黒羽君、愚痴らない、愚痴らない。」

もつとも、そう言わてもやるのは快斗自身なのだからどうしようもない。しかも、今回他に出演者がいないというのも快斗が怒っている理由のひとつであった。

快斗

「なんで俺一人だけ・・・」

まあ本編の撮影が終わつているのだからしようがない。夕方までは「ナンや蘭たちもいたが、さすがにもういない。

時刻は午前1時。マジカルランドの営業時間外の撮影をしなければならないため、この時間しか撮影できる時間は空いていなかつた。しかし、この日は例によつて風が強かつた。

地上とタワーの発進台につけられた風速計がぐるぐる回つてゐる。

スタッフB

「こりやあ風が強すぎり、今日は無理じゃないかな?」
そんな声が囁かれる。

快斗

（そうなつてくれた方がありがてえ。）

快斗も本氣でそう思つてしまつ。しかし、青山監督はそんな弱音を認めない。

青山

「何! 風が強いから無理だと! ! ダメダメ、なんとしても撮影するんだ。風が弱まつた瞬間やればいいだる、もう今日しかマジカルランドの撮影許可取れないんだから、中止は絶対許さん! !」監督（原作者）の言葉は神の言葉。だれも逆らえない。

そして、時間はさらに流れ、午前3時。

風がぴたりとやんだ。風速計も止まる。

青山

「ようし、黒羽ちゃん、飛べ、飛べ! !」
下にいる監督が発進するよう叫びへくる。

スタッフA

「よし、黒羽君、行って! 」

よつやくとばかりに、快斗はハンググライダーを開き、発進台から飛んだ。

快斗は慎重にグライダーを操縦し、マジカルランドの方へ飛んでいく。

一方、地上では。

青山

「ようし、黒羽ちゃんが飛んだぞ、ジェットコースタースタート

「！」

監督の指示が飛び、地上のスタッフがジェットコースターをスタートさせる。

今回のシーンでは、快斗がジェットコースターの側を飛び越える事になつてゐる。ちなみに彼が爆弾を取る瞬間はスタジオで撮った映像を合成する。

青山

「後はタイミングだ。」

今回の撮影でもし失敗すれば、それこそ快斗が飛びなおすことが始めるべならない。その時、風が吹いていればもうダメである。監督の言葉の意味はここにある。

そんな監督の心配をよそに、快斗は順調に飛んでいた。ちなみに、俯瞰撮影をするため、動力付きグラライダーに乗ったカメラマンが後ろに付いていく。

そして、ジェットコースターと一緒にスマークスするコースに乗り、後はタイミングを計りながら近づく。

快斗

（行けるか？）

その様子を下から双眼鏡で青山監督も見ていた。
その時はほんの一瞬であった。

快斗

（どうだ？）

快斗も、そしてスタッフ達も青山監督の次の言葉を待つた。
青山監督は確認用モニターを見ながら、静かにこう呟つた。

青山

「・・・・・はい、OK・・・・・」

それは全員が待ち望んでいた言葉であった。

快斗

（よし、あとは降りるだけ！）

その時、強風がグラライダーを煽つた。

快斗

(ーー?)

スタッフ

「やばいーー風がーー！」

そして、快斗は遊園地外側の垣根に落ちた。

スタッフ

「落ちたーー？」

スタッフ全員が走った。

そして・・・

快斗

「ふう、危なかつた。」

無事だった。立ち上がった彼を見て、全員が胸を撫で下ろした。
こうして、ラストシーンの撮影は終わった。

快斗

「これで終わりか。あーあ、朝帰りかよ。」

既に時計は午前4時を指している。もはや他の出演者がいるはずがない。

快斗

しかし、そんな萎れて顔を下げていた快斗の隣に、花束が。

快斗

「えーー？」

顔を上げると、そこにはコナンの顔が。

快斗

「こ、コナン、どうしてーー？」

そして、気づいた、彼だけじゃない、蘭や哀、少年探偵団など毎回の撮影に出ていた人々がいた。

コナン

「快斗兄ちゃん、クランクアップおめでとう。」

そう言つてコナンが花束を渡した。ところ、快斗が驚く事態が。

新一

「おつかれさん、快斗。」

今回の映画ではまだとんど出番のなかつた新一まで来ていた。

快斗

「な、 なんで？」

新一

「馬鹿野郎、俺たちがそんな薄情な奴に見えるか？
その言葉に、感動し言葉が出ない快斗。
そこへ、青山監督がやつて来た。

青山

「おー！？ お詫びしているね、よつし詫びで飲みに行くか、俺のおじつで。
無礼講だ！ 毎晩で飲み明かそうぜーーー。」

全員

「おおーーーー。」

青山

「じやあ早速いくか。」

いつして全員移動する。そんな中、未だ信じられない様子でたつ
ている快斗に青山監督が声をかける。

青山

「ほら、黒羽ちゃんも行くよ。今日は君が主賓なんだから。」
その言葉に、我に帰る。

快斗

「はーーーー！」

青山監督に呼ばれ、快斗も歩き始めた。

この後、全員で曲でダンスをしたのはいつまでもない。

注意1 これは事実ではありません。

注意2 この話は、フィクションを基にしたフィクションです。

(後書き)

今回まじ快のおまけに触発されて書きました。
話の一部には、自分が中学生日記で体験した経験も反映させています。

皆さんの忌憚なき御意見・ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5630b/>

あの時・・・・

2010年10月10日16時11分発行